



～中標津町パートナーシップで進めるまちづくり町民会議～

「パートナーシップ」なかしべつフォーラム

【結果報告】

平成17年11月から1年半。町民委員と町職員で組織する町民会議において、「パートナーシップで進めるまちづくり」を実現するための、目指すべき方向性や方針、手法、ルール、システムについて、町民会議委員が異なる意見を出し合い議論してきたまちづくりへの思いを、「パートナーシップなかしべつ提言(案)」としてまとめ、町民の皆さんに報告することを目的とし本フォーラムを開催いたしました。

- 日 時 平成19年3月1日(木) 19:00～21:00
- 場 所 中標津町総合文化会館コミュニティホール
- 主 催 パートナーシップで進めるまちづくり町民会議・中標津町・北海道
- 参加者 140名

プ ロ グ ラ ム

挨拶

パートナーシップで進めるまちづくり町民会議会長
中標津町長

野毛 徳利 氏
西澤 雄一 氏

第1部 経過報告

パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員

長瀬 豊 氏

第2部 パネルディスカッション

○コーディネーター

特定非営利活動法人 旧小熊邸倶楽部代表

パートナーシップで進めるまちづくり町民会議ファシリテーター 東田 秀美 氏

○パネラー

パートナーシップで進めるまちづくり町民会議会長
パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員
パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員
パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員
パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員
中標津町長

野毛 徳利 氏
田中 俊憲 氏
西村 穰 氏
千葉 幸子 氏
須永 真樹 氏
西澤 雄一 氏

【司 会】

ただ今から、「パートナーシップなかしべつフォーラム」を開催いたします。

私は、本日の司会を務めさせていただきます、糸氏と申します。よろしくお願いいたします。

開会にあたり「パートナーシップで進めるまちづくり町民会議」会長 野毛徳利よりご挨拶申し上げます。

【挨拶】

19:00～19:10

○ パートナーシップで進めるまちづくり町民会議会長 野毛 徳利

こんばんは、ただ今ご紹介のありました野毛です。

よろしくお願いいたします。

「パートナーシップで進めるまちづくり」町民会議が設置されてから、これまで16回の会議を開いてきました。この3月にもう一回開催し、末に町長に話し合った結果を報告することになっています。

今日は、これまでの経過報告となりますので、よろしくお願いいたします。

この町民会議は、平成17年11月に公募によって設置されました。

町民、団体、企業、行政とのパートナーシップの確立に向け、課題の発見、目指すべき方向性、方針について、お互いに理解を深めながら議論する場としてスタートしました。

町民会議は当初、行政に対する批判の話ばかりで、2回、3回の会議では、何のための会議なのか、何のためのパートナーシップなのかということで、試行錯誤しながら会議をしていました。

しかし、行政に対する批判を「課題」として捉え、町民委員、町職員と一緒に課題解決に向け議論することが、町民会議でのパートナーシップの始まりでした。

これまでの公共サービスは、行政が主体となって担ってきており、町民ニーズに対してきめ細かに対応し、質の高い公共サービスを提供してきました。

また、町民もそれが当たり前の事のように過ごしてきました。

しかし、これからの町の財政状況は厳しい時代になっていくと思われますし、行政サービスの質もこれ以上は期待できなくなってきています。

このような問題解決に向けて、行政だけで考えるのではなく、我々町民、団体、企業も理解をする必要があり、いろいろな情報を共有し、対等な関係を築き、連携して「パートナーシップで進めるまちづくり」を進めていきたいと思います。

そのためには、具体的な制度、仕組みなど確立することによって、我々が安心して暮らせる、住みよいまちづくりにつながっていくと思います。

今日は、パートナーシップで進めるまちづくりの実現に向け、これまで話し合ってきたまちづくりの思いを皆様に報告する日でありますので、よろしくお願いいたします、私の挨拶とさせていただきます。今日は本当にありがとうございました。



【司 会】

続きまして中標津町長西澤雄一よりご挨拶申し上げます。



○ 中標津町長 西澤 雄一

皆さん、こんばんは。

今日は寒い中たくさんの方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

ただ今、野毛会長さんからお話がありましたとおり、平成17年11月に「パートナーシップで進めるまちづくり」町民会議が開催されてから、16回の会議を夜、無償で集まって会議をしていただきました。

大変難しい問題に、熱心に取り組んでいただいた委員の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

また、今日のコーディネーターの東田さんには、会議のかじ取り役として会議を引っ張っていただき、お礼を申し上げます。

そして、町民の皆さんに集まっていただき、とてもうれしく思い、厚くお礼を申し上げます。

今日のフォーラムにつきましては、1年半にわたり会議で話し合われた内容を皆さんに聞いていただいて、皆さんと一緒にこれからのまちづくりを考えていこうという趣旨で開催するフォーラムであります。よろしくお願いします。

ご存知のとおり、地方財政、大変厳しい時代になり、倒産する自治体も出てきています。

中標津町は、北海道の中でも大変元気の良いまちと評価されています。

これも、日ごろの町民の皆さんのご努力、そして、このまちをつくっていただいた、先代の方のおかげであると思っています。

これからも続くであろうこのまちを、未来の子供たちや孫たちに更に良いまちとして伝えていく責任が私たちにはあると思っています。

行政も町民も対等な立場になって、このまちをどうしていったら良いかをこれからも一緒になって話し合う、「パートナーシップで進めるまちづくり」のスタートとなる日と思います。

私も後ほど、パネラーのひとりとして発言をさせていただきたいと思っていますので、最後まで熱心に議論いただきながら、良いまちづくりに共に汗を流すように力を貸していただきたいようお願い申し上げます、お礼に代えさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。



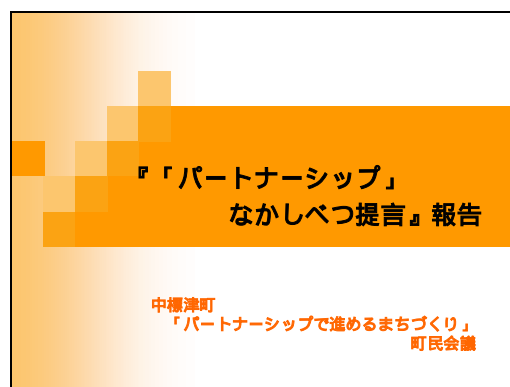
【司 会】

それでは、第1部「パートナーシップで進めるまちづくり町民会議の「経過報告」を、町民会議 委員 長淵 豊よりご報告申し上げます。

長淵委員よりお願いいたします。

○ パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員 長 瀧 豊

皆さん、こんばんは。
これから、中標津町「パートナーシップで進めるまちづくり」町民会議が作成した、『「パートナーシップ」なかしべつ提言』についての報告をいたします。
私は、報告者の長 瀧 豊です。
報告時間は、15分を予定しております。
よろしくお願いいたします。



まず始めに、「パートナーシップで進めるまちづくり」町民会議とは？平成17年11月に設置され、町民からの公募委員32名、町職員からの公募委員23名、合計55名により、「町民・行政・企業・団体」とのパートナーシップの確立に向け、パートナーシップの課題や目指すべき方向性や方針について、お互いに議論を深めながら議論する場としてスタートしました。

行政に対する批判から始まりましたが、批判を課題として捉え、町民委員と町職員が課題解決の方法を議論しました。それが、町民会議のパートナーシップの始まりでした。

そしてその結果である、この提言が中標津町のパートナーシップの始まりである、と考えております。

なかしべつ提言ができるまで、55名の委員がどのような方法で話し合ったのか？と言いますと、基本は「グループワーク」での話し合いです。

これは、

いくつかのグループに分けてグループワークを行ない、意見をラベルに書き出していきました。

似たような内容のラベルをまとめ、キーワードや考え方を整理していきました。

グループ毎に発表し、全員で情報を共有しました。

キーワードや考え方をカテゴリー別に分け、町民会議としての意見を整理しました。

「パートナーシップで進めるまちづくり」町民会議とは？

- 平成17年11月に設置され、「町民・行政・企業・団体」とのパートナーシップの確立に向け、パートナーシップの課題や目指すべき方向性や方針について、お互いに議論を深めながら議論する場としてスタート。
- 行政に対する批判から始まったが、批判を課題として捉え、町民委員と町職員が課題解決の方法を議論した。町民会議のパートナーシップの始まりであった。
- そしてその結果である、この提言が中標津町のパートナーシップの始まりである。

<なかしべつ提言ができるまで>
どのような方法で話し合ったのか？

基本は、「グループワーク」での話し合い

いくつかのグループに分けてグループワークを行ない、意見をラベルに書き出していった。
似たような内容のラベルをまとめ、キーワードや考え方を整理していった。
グループ毎に発表し、全員で情報を共有した。
キーワードや考え方をカテゴリー別に分け、町民会議としての意見を整理した。
文章作成班を選出し、文章化していった。

文章作成班を選出し、文章化していきました。

これを数回繰り返し、全体で共有しながら、議論や発案を行ないました。

この方法は、自分だけの意見を主張することなく、たくさんの人の意見を平等に扱うことができ、パートナーシップには相応しい方法でした。

そのグループワークの中で、一番最初に話し合ったことは、「どんな状態であることが、パートナーシップで進んでいるなあ」と感じるか、そして「その状態になるためには、どんなことが必要か」ということでした。

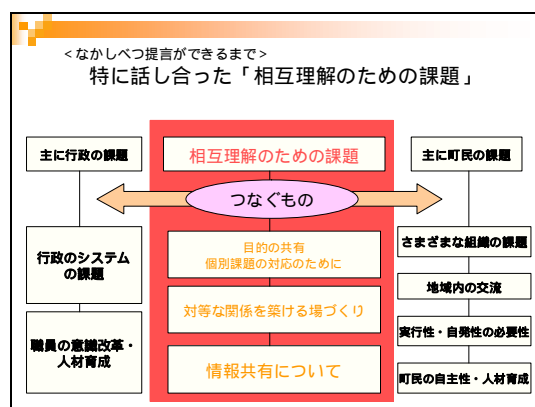
その結果、相互理解のために必要であると整理された、
情報共有について

対等な関係を築ける場づくりについて

目的の共有や個別の課題の対応のための解決策案を探る
という項目について、話し合いをしていくことになりました。

その話し合いの結果を取りまとめたものが、『「パートナーシップ」なかしべつ提言』です。

それでは次からは、提言の内容について、概要をお伝えいたします。



「パートナーシップ」なかしべつ提言の概要

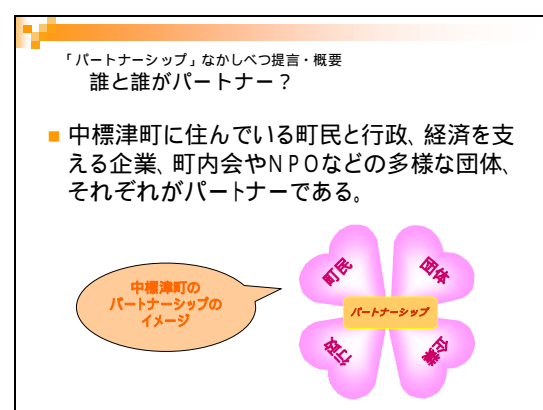
「パートナーシップで進めるまちづくり」とは、中標津町の「町民・行政・企業・団体」が、地域課題を共有し、対等な立場で相互理解による良好な協力関係のもと、共に汗をかき、住みよいまちづくりを目指していくことと、町民会議では合意されました。

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要
「パートナーシップで進めるまちづくり」とは？

- 中標津町の「町民・行政・企業・団体」が、地域課題を共有し、対等な立場で相互理解による良好な協力関係のもと、共に汗をかき、住みよいまちづくりを目指していくこと。

では、その時に、誰と誰がパートナーであるか？ということですが、中標津町に住んでいる町民と行政、経済を支える企業、町内会やNPOなどの多様な団体、それぞれがパートナーである、と確認されました。

スライドに、中標津町のパートナーシップのイメージ図が掲載されております。



では、なぜ、パートナーシップを考えるのでしょうか？行政からみた必要性として、

いろいろな価値観やライフスタイルを持つ人々が、自分の必要に見合ったきめ細やかな公共サービスを求める時代になりました。

しかし、行政サービスは住民に対する公平と公正が原則であり、要求されるすべてのきめ細やかなサービスには、対応しきれません。

また、第3セクターや民間委託などにより民間資源を行政サービスに取り入れてきましたが、主と

して行政主導のサービス提供でした。

民間のサービスは、効率的で質も高く、行政サービス総体の費用を低減し、町の財政不足を補うことができます。

住みよい中標津町を実現するには、行政だけで取り組むのではなく、民間企業やNPOなどを公共サービスに活かしていく必要がある。

というような必要性が整理されました。

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要
なぜ、パートナーシップを考えるのか？

<行政からみた必要性>

- いろいろな価値観やライフスタイルを持つ人々が、自分の必要に見合ったきめ細やかな公共サービスを求める時代になった。
- 行政サービスは住民に対する公平と公正が原則であり、要求されるすべてのきめ細やかなサービスには、対応しきれない。
- 第3セクターや民間委託などにより民間資源を行政サービスに取り入れてきたが、主として行政主導のサービス提供であった。
- 民間のサービスは、効率的で質も高く、行政サービス総体の費用を低減し、町の財政不足を補うことができる。
- 住みよい中標津町を実現するには、行政だけで取り組むのではなく、民間企業やNPOなどを公共サービスに活かしていく必要がある。

改めて、パートナーシップについて町民会議では、「パートナーシップは、住みよい中標津町の地域コミュニティを実現するために必要である」という意見で合意しました。

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要
パートナーシップについて

- 町民会議では、「**パートナーシップは、住みよい中標津町の地域コミュニティを実現するために必要である**」という意見で合意しました。



そして、パートナーシップを推進するために町民会議では、行政と町民がパートナーシップでまちづくりを進めていくためには、今まで以上に相手のことを知る必要があり、「それぞれの情報を共有し、議論を重ね、信頼のおける対等な関係を築くことが重要である」という意見で合意しました。

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要
パートナーシップを推進するために

- 町民会議では、行政と町民がパートナーシップでまちづくりを進めていくためには、今まで以上に相手のことを知る必要があり、「**それぞれの情報を共有し、議論を重ね、信頼のおける対等な関係を築くことが重要である**」という意見で合意しました。



次に、具体的なことについて話し合いがなされ、パートナーシップを推進するために、情報共有の問題点や、共有したい情報にはどんなものがあるのか、などについて話し合いしました。その結果から、情報共有について補っていく必要がある事柄として、

繰り返しの情報発信が必要である。

誰にでも、わかりやすい表現が必要である。

多様な伝達方法（電話、訪問など）による対応が必要である。

ということが合意されました。

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要
パートナーシップを推進するために

- 情報共有の問題点や、共有したい情報にはどんなものがあるのか、などについて話し合った。
- その結果から、**情報共有について補っていく必要がある事柄**
 - 繰り返しの情報発信が必要である。
 - 誰にでも、わかりやすい表現が必要である。
 - 多様な伝達方法（電話、訪問など）による対応が必要である。

情報共有の考え方として、

情報は、どちらから一方的に提供されるものではなく、お互いがよく理解し、共有すべきものであります。必要な情報については、行政からの提供を待つのではなく、町民自ら得ようとする努力が必要です。

行政は、行きやすく聞きやすい状態になっていることが必要であり、行政の情報は町民に対して、「いつでも見られる、見たいときに見られる情報」になっていることが重要です。

今後は、行政と情報共有を促進するために、役場の誰もが案内窓口であるという意識を持つことと、発信方法を工夫する必要がある。

ということが合意されました。

次に、対等な関係を築ける場づくりについて、現在の行政・議会・町民・コミュニティなどの問題点や課題を話し合いました。

その結果から、対等な関係を築くために補っていく必要がある事柄として、

できる限り「対面での情報交換」を心がけ、正確な情報を伝える。

立場や肩書きなどにこだわらず、互いに相手を尊重し、態度や言葉遣いに気をつける。

会議のルールに「対等であること」を明記するなど、会議の進行方法にも工夫を取り入れる。というようなことが、合意されました。

対等な関係を築くための考え方として、

行政と町民は、どちらが上でどちらが下ということではない。

お互いに相手を尊重し、対等な立場で議論できる場の設置と参加が重要である。

行政と町民が対等な議論をしていくためには、NPOなどの育成や町内会の活性化などが必要である。

ということが合意されました。

パートナーシップを推進するための具体的な解決策としてたくさんの意見がでました。ここでは、提言に書かれた意見をすべてお伝えできないので、一部をご紹介します。

情報共有のための解決策として・・・

例えば、

広報紙のあり方として出された意見は、広報作成ボランティア、公共施設以外での閲覧推進など。

ホームページのあり方として、意見を書き込めるようにしてほしい、データベースの充実など。

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要
パートナーシップを推進するために

■ 情報共有の考え方

- 情報は、どちらから一方的に提供されるものではなく、お互いがよく理解し、共有すべきものである。必要な情報については、行政からの提供を待つのではなく、町民自ら得ようとする努力が必要である。
- 行政は、行きやすく聞きやすい状態になっていることが必要であり、行政の情報は町民に対して、「いつでも見られる、見たいときに見られる情報」になっていることが重要である。
- 今後は、行政と情報共有を促進するために、役場の誰もが案内窓口であるという意識を持つことと、発信方法を工夫する必要がある。

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要
パートナーシップを推進するために

■ 対等な関係を築ける場づくりについて、現在の行政・議会・町民・コミュニティなどの問題点や課題を話し合った。その結果から、

■ 対等な関係を築くために補っていく必要がある事柄

- できる限り「対面での情報交換」を心がけ、正確な情報を伝える。
- 立場や肩書きなどにこだわらず互いに相手を尊重し、態度や言葉遣いに気をつける。
- 会議のルールに「対等であること」を明記するなど、会議の進行方法にも工夫を取り入れる。

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要
パートナーシップを推進するために

■ 対等な関係を築くための考え方

- 行政と町民は、どちらが上でどちらが下ということではない。
- お互いに相手を尊重し、対等な立場で議論できる場の設置と参加が重要である。
- 行政と町民が対等な議論をしていくためには、NPOなどの育成や町内会の活性化などが必要である。

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要
パートナーシップを推進するための
具体的な解決策

情報共有のための解決策として・・・例えば、

■ 広報紙のあり方

広報作成ボランティア、公共施設以外での閲覧推進など

■ ホームページのあり方

意見を書き込めるように、データベースの充実など

■ その他

町政情報コーナーの充実、パブリックコメントなどの導入など

その他として、町政情報コーナーの充実や、パブリックコメントなどの導入などが上げられています。
今回の提言では、中標津町では初めて、パブリックコメントを試行いたしました。

ほかに、対等な関係を築くための解決策として・・・
例えば、

パートナーシップの拠点づくりとして、NPO活動センターやコミュニティルームなどを設置できないか？

パートナーシップの参画推進として、まちづくり懇談会や出前講座の充実、町民と職員の合同の研修会などの意見、パートナーシップの展開として、モデル事業を行なう、事業評価をする、NPOなどを育成するなどの意見が出されています。

今後の取り組みですが、

情報共有や対等な関係を築くための具体的な解決策については、さまざまな意見が出されましたが、「できるもの、できないもの」「誰が、どうやればできるのか、いつごろできそうか」といった方法論の整理が必要です。

このような方法論の整理も含めて、パートナーシップで進める必要があると、合意されています。

1年半かけて進んできた町民会議は、一定の役割を終えて今年度で終了しますが、今後も行政と町民が共に「パートナーシップで進めるまちづくり」に取り組むことを合意しました。

最初は、なかなか前に進まず、どうなることかと思われた町民会議も、話し合いが進むにつれて、お互いが理解しあえたと自負しています。

今は、来年度へ向けた取り組みについても、活発に意見が出されています。

これからも中標津町のパートナーシップは、行政と町民が共に取り組み、進めることが大切だと感じています。

以上、『「パートナーシップ」なかしべつ提言』の報告を終了させていただきます。

ありがとうございました。

【司 会】

町民会議委員 長瀬 豊よりご報告させて頂きました。

ご清聴ありがとうございました。

さてこれより、第2部に入る前に10分ほど休憩とさせていただきます。

意見シートに記入して頂きました方は、休憩時間に会場にいる係員にお渡しください。

なお、皆様のご意見は、第2部のコーディネーターに手渡すことになっておりますので、できるだけお早めにお渡しくださいますようお願いいたします。

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要

パートナーシップを推進するための

具体的な解決策

対等な関係を築くための解決策として・・・例えば、

■ パートナーシップの拠点づくり

NPO活動センターやコミュニティルームなどを設置できないか？

■ パートナーシップの参画推進

まちづくり懇談会や出前講座の充実、町民と職員の合同研修会など

■ パートナーシップの展開

モデル事業を行なう、事業評価をする、NPOなどを育成するなど

「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要

今後の課題

■ 今後の取り組み

○ 情報共有や対等な関係を築くための具体的な解決策については、さまざまな意見が出されたが、「できるもの、できないもの」「誰が、どうやればできるのか、いつごろできそうか」といった方法論の整理が必要である。

○ 方法論の整理も含めて、パートナーシップで進める必要がある。



「パートナーシップ」なかしべつ提言・概要

町民会議、終了後は？

- 町民会議は、一定の役割を終えて今年度で終了するが、今後も行政と町民が共に「パートナーシップで進めるまちづくり」に取り組むことを合意した。

これからも「パートナーシップ」に
共に取り組む！

一緒に進もう！

・・・・・・(10分休憩)・・・・・・

【司 会】

それでは、ただ今より、パートナーシップなかしべつフォーラム第2部、パネルディスカッションを開始いたします。

まず始めに、コーディネーターとパネラーの方をご紹介します。

皆様から向かって左、本日のコーディネーター、パートナーシップで進めるまちづくり町民会議ではファシリテーターを務めていただきました、特定非営利活動法人 旧小熊邸倶楽部代表、東田秀美さんです。

つづきまして、パートナーシップで進めるまちづくり町民会議会長の野毛徳利さんです。

つづきまして、パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員の田中俊憲さんです。

つづきまして、パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員の西村 穰さんです。

つづきまして、パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員の千葉幸子さんです。

つづきまして、パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員の須永真樹さんです。

そして、向かって右側は、中標津町長 西澤雄一さんです。

それでは、このあとは、コーディネーターの東田さんにおまかせいたします。

東田さん、よろしくお願いいたします。

■ 第2部 パネルディスカッション

19:35 ~ 21:00



パートナーシップで進めるまちづくり
町民会議ファシリテーター
特定非営利活動法人 旧小熊邸倶楽部
代表 東田秀美さん

NPO法人旧小熊邸倶楽部の東田と申します。

NPO法人旧小熊邸倶楽部というのは、北海道内の歴史的建造物の保存再生を行なっています。

中標津町には縁がありまして3年ほど前から毎月2回から3回程こさせて頂いています。

私自身は北海道立市民活動促進センターというところで、企業の方とか、行政の方とか、NPOとの協働（パートナーシップ）市民活動についての相談などを行なっているセンターの職員も兼ねています。

もともとNPO法人も行なっているのでセンターの職員も兼ねていますが、縁があって中標津町の「パートナーシップで進めるまちづくり町民会議」のファシリテーターということで、先導役というような感じでしょうか、会議の進行をしたり、意見を述べさせて頂いたり、取りまとめをしたりする役をやらせて頂いておりました。

今回、ファシリテーターを務めておりましたので今日という大変大きい場所、フォーラムのコーディネーター役も

仰せつからせて頂きました。つたない進行ですけれども一生懸命務めますので宜しくお願い致します。

今日はコーディネーターということですので、自分はあまり喋らずにパネラーの方には是非マイクを向けて、どういう思いでこの町民会議を行なったか、これからどうして行くのか、というようなことをパネラーの皆さんから聞き出したいと思いますので宜しくお願いします。

それでは、自己紹介も兼ねて最初のマイクを廻したいのですが、何故、この町民会議に参加しようと思ったのか？ということ、一人ずつお話しして頂きたいと思います。

町長は質問を変えさせて頂いて、何故、この町民会議を組織しようと思ったのか？ということをお話しして頂きたいと思います。

それでは、会長からお願いします。



パートナーシップで進めるまちづくり町民会議
会長 野毛徳利さん

何故、この町民会議に参加したか？と言う事でございますが、実は私は商工会の理事をしておりまして、たまたま商工部会の理事でありまして、中標津の中心市街地活性化という問題があり、この問題にどう対応して行くのが良いのか。ということで、2年間くらい調査したり勉強したりしました。

そういう中で中心市街地が地元の企業だけでは、どうにもなら無いという現状があり、皆さんご存知のように大型企業が郊外に移って行くことによって、抜けた後がなかなか埋まらない、街の中に人を残すためにはどうしたら良いのだろうと大変苦労しているということで、その辺の問題を随分考えています。

そういう意味で商工会として取りまとめた提言書というか、そういうような物を町長さんのほうに提示したという経緯があり、商工業者の思いだとか、そういう事が一番分かるのが民間出身の町長さんなので、そういう部分では一緒に思いを伝えて、そして何とか自分たちの町を自分たちの力で行動を起こすことによって、変えて行かなければならないのではないかと思います。

中標津という町は恵まれていまして、何が恵まれているかという周辺の人達が買い物に来てお金を落としていくだとか、空港だとか、そういう意味では非常に恵まれている部分があると思います。

それだけに、逆に言えば何もなくてもいい部分も行政にはあるのではないかと思います。

なかなか民間ベースの声が行政の中に届かないというようなことがあり、それを何とか出来ないか考えています。

そんな経緯の中で平成17年11月に町民会議があるということで、それでは、それに私も出て行って意見を言いたい。一緒になって考えたい。という思いがあり参加しています。それが動機でございます。

【コーディネーター 東田秀美さん】

今日、この質問は、パネリストの皆さんどういう質問されるか全く知りません。その状態で始めています。リアリティーのあるところを聞いていただきたいと思います。



パートナーシップで進めるまちづくり町民会議
委員 田中 俊憲さん

長いこと勤めていた職場を平成16年に退職しまして、中標津をあっちこっち見て廻って、それまで花なんか知らなかったのだけど、花を見ても良いし山も綺麗だなと思うようになりました。

それと、私が勤めたころの水は本当に旨かったと思っていました。それが最近、少し水の味も落ちてきていると思う。

私が来た時は車で道路を走っていても、農家の家が見えないくらい木が生えていたんです。

それが最近、少し眺めれば間違いなく農家にたどり着けるような風景になったということは、木が無くなって来たんです。木が無くなると水量が落ちるんじゃないかと思うんです。それで水の味も落ちてきているのではないかとあって、では、水の味を良くしてと、町に言いたいと思い参加しました。



パートナーシップで進めるまちづくり町民会議
委員 西村 穰さん

西村です。宜しくお願いします。私はこの中で役場の職員ただ一人ですが、何のことは無く私は仕事で作業にかかりました。

それで、平成 16 年 10 月に西澤町長が当選した時の公約で、その時に作った所信表明がありまして、その中に、「パートナーシップで進めるまちづくり」を取り組むことが書いてありまして、当然、書いてあるという事は進めなければいけないということで、たまたま私がその時の進める担当でした。

途中で担当が変わりまして、その時、辞めようかとも思ったんですけども、辞めるときって役場の奴は担当が変わるとそのまま居なくなってしまうとよく言われておりますので、やはりそれを言われるのは私も心外でしたので、何となくお付き合いしながら行なってきました。

でも、始めのころから見ると話がいろいろ弾んで、いろんな展開があって面白く最後まで見れて、また、この後いろいろ続くと思いますので、そちらのほうも楽しみにしながら自分自身も参加して行きたいと考えています。



パートナーシップで進めるまちづくり町民会議
委員 千葉 幸子さん

千葉です。宜しくお願い致します。同じ地域にある程度住んでいると、それなりに一市民とはいえ、行政とか住環境など、それなりに意見は持つものなのですが、なかなか組織力も無い一市民としては、行政に意見が反映しないのです。

世間話で愚痴は出るのですが、行政にはどうしても届けられない。届いたとしても本当の意味では聞いてもらえないというのが、今までだったと思うのです。

それでこの度、町民一般に肩書きも何も無くても参加しても良いよという事でしたので、訳も分からず具体的にこれがこうなったら良いな。という思いを持って入ったのです。

そのような動機から一般市民の声を聞いて行う姿勢でしたので、参加してみました。



パートナーシップで進めるまちづくり町民会議
委員 須永 真樹さん

須永です。今日は宜しくお願いします。私がこのパートナーシップで進めるまちづくり町民会議に参加したのは、こちらに居る西村さんからお電話を頂いて、ちょっとやってみないか？ということで、実際、何を話し合うかも当日参加するまで良く分からないで、参加したという経緯なんです。

今こうしてそんな形で参加した私がここに座って何を話したらいいのかわからないし、戸惑っているし、緊張しています。

話し合いに参加させて頂いて、正直、何を話し合っていたのかわからないような状態、自分の考えを持って参加した訳ではなかったので、付いて行く事に精一杯だったというふうに思っています。

【コーディネーター 東田秀美さん】

それでは町長には、何故、この町民会議を組織しようと思ったのか？というところを、お話して頂きたいと思います。



中標津町長 西澤 雄一さん

最初考えていても、ずっと聞いていると考え方って変わってくるもので、困ったなと思っていますが、西村君が今言ったように、私は民間出身の町長であります。

ですから、選挙期間中も行政と民間は同じ目線でまちづくりをして行くのだということを、街頭演説等で発言していた、言い続けたことであります。

町長になってからそれは実現したいということであります。

少し驚いた文章を見たのですが、行政に対する町民のイメージというのは本で読んだのですが、「おかたい」というのですよ。それで、「おかたい」の「お」は、遅いの「お」なんです。ダラダラしている。のんびりしている。スピード感が無いの「お」なんです。「おかたい」の「か」は、固いの「か」なんです。これは形式的だ。

それから、「おかたい」の「た」は、縦割り。これは責任回避である。

それから「い」は、威張る。傲慢。生意気。これが、町民が行政に対するイメージだということで驚いたのですが、こういう行政になってはいけないという思いを、まず、しておりました。

もう一つは、就任以来、国の構図が随分と変化してきました。

今までは中央の言いなりで、やっていけば良いという時代から、いわゆる中央集権的な時代から地方主権、地方分権、地方のことは地方が考え、責任を持つ時代に変化してきた。

このようなことから、行政と町民が一緒になって考えて行かなければならない時代になってきた一つの原因です。

もう一つは、中標津町は合併は断念を致しまして自律できておりますけども、財政は非常に厳しい状態になっております。財政の予算の使い方というのは、今まで通りの使い方が正しいのか。良いんだろうか。という事もある種とても疑問に思う時もあります。使い方はもっとこういうことに使った方が良いのではないかと。というような、いわゆる惰性で来ているものを改革するという意味では、町民の意見を引き込むということも大事ではないだろうか。

こんな事を総合的に考え、今回のパートナーシップでの会議の創設になったと私は考えています。

【コーディネーター 東田秀美さん】

次の質問ですが、先程の報告にもありましたとおり町民の皆さんが32人、役場の職員の方が23人、合計55人で、町民会議が設立されました。

実際こういう形で一緒に話し合いをして一つの提言を作るという作業そのもの、今日、たまたま意見シートの頂いた方にも、どういう批判が出たのか教えて欲しい。というようなご意見もありました。

そういった形で、まず話し合いをするという事の不安だとか、実際作業してみてどう思ったか。それぞれの個人的な考え方でかまいません。

まさに町民会議を進めること自体がパートナーシップだったと私自身思っていますが、実際参加してみて、とまどいだとか、不安だとか、不満だとか、批判だとかも含めて、最初参加したころと、そして今は終わりに近づいてきて、心境の変化のようなものはありましたでしょうか。

会長からお願いします。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議会長 野毛徳利さん】

先程の挨拶の中で、始めの3回くらいは本当に、この会議に皆集まってはいるのですが、どうなるか分からないと、逆に言えばなかなか分かり難いと、それはやはり、今までそういう場も無かったし、逆に、皆がいろいろな事を思って出て来たんだけど、それを受け止める場が無かったものだから、それが批判になってしまう。

ですから、行政はこんな事もやってくれない、あんな事もやってくれない。という言い方しか出来ていなかった。しかし、回を重ねる事に、もし、こういうものがルール化されていけば、いろんな問題がたくさんあると思いますが、綺麗に整理されて行けば、こういう問題については、こういう所に来てお話しすれば、良いか悪いか出来るか出来ないか。というような判断をしてもらえるのではないか。というようなことを感じたと思うのです。

今日、議員さんも来ていると思いますが、今まではどちらかというと、町民の代表である議員さんが、そういうことを聞いて議会にかけてくれて。という思いがあるのでしょうけど、なかなかそういうふうに行かない。

その辺でなかなか受け止めてくれる場が無いということで、その辺が会議を行なっていく中で理解出来てきたことだという気がしました。



【コーディネーター 東田秀美さん】

意見シートの中に丁度そのような意見がありまして、パートナーシップが目的であるのか、方法なのか良く分かりません。今回の取り組みは、取り組み方の取り組みですか。

まさにおっしゃるとおりです。一個一個の個別に取り組む前の整備。どのように取り組めば良いか。個別の課題の手前の状態です。

それを皆で話し合ったと言えます。

それでは、田中さんの戸惑いや不安、始まった時と今の変化をお話ください。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員 田中俊憲さん】

始まった時、どうせこういう会議というのは言わせるだけ言わせて、その後は、ウヤムヤになる会議が多いのではないかと私は予想してきました。

でも、そうじゃなく、この会議は次年度にも予算はついてるか、ついていないか分からないが、形として残るようです。

具体的な話としても町民が憩える場所を提供しなければならない。NPOの設立のための準備出来るような場所も提供しなければならない。というような方向に見えます。

かなり具体的であるし、且つまた、次年度まで続く会議になって行くというのは、良い方向に向かったのではないかなと思います。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員 西村 穰さん】

先程の長瀬さんの説明にもありましたが、始める時の感覚というのは、ガス抜きの会議なのではないか。という方もかなりいらしたようです。

また何か始めたな、何をやるのだ一体。ということを随分始めのころ言われまして、本当に何回かはよく分からないまま進んだという感じです。

僕らのイメージというのは、行政が会議を開いて住民と向かい合って話をする時に、言われたことに対して何とかしなければいけない、行政側が何とかしなければいけない。と常に考えて答えてしまう。

そんな意識がすごく強かったのです。

今回はそうではなく、仮に出された問題を、私が答えるのではなく一緒に考えてどうしたら解決するか一緒に話しましょうと逆に投げ返すことが数多くあり、そういうふうになると、住民側の人は少し戸惑いもありまして、逆に行政側の僕らは、少し楽になりました。

今まで言われて何か答えなければいけないという。一生懸命困っていたような雰囲気が、ちょっと一緒に考えて結論出しませんか。批判じゃなくて問題、課題にしてどうやって答えるか。どうやって考えるかを皆で考えましょう。というふうに変わって行って、それを解決するためには、お互いどういう立場でどういうルールを作ったら良いのだというふうに、段々発展して行ったというのが、話し合いの経過の中で非常に僕は面白かったです。

それを考えるようになると段々と旨く話が進むようになって来るという。そういった経過というのは私非常に楽しく面白く、こういった経験はなかなか無いのだと思います。

先程、千葉さんが言っていましたとおり、割と団体の方に出てもらうというような、職を指名して出て頂くような会議が多いのですが、とにかく、そういう議論したい方は来てください。という呼びかけというのは、あまり無いので、そういう部分で多種多様の方が来てくれて、話に積極的に参加してくれたというのは、行政側としては非常に面白くありました。

でも、後から話しますけども、僕は少し行政側として、住民の方がとことん行くぞとなった時に行政側が逆に付いて行けるのかな。というような若干心配はしておりまして、その辺は今度住民パワーが行政を仕切るようになるんだろうな。という期待もしております。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員 千葉幸子さん】

最初はこういう話し合いとは全く思わないで、具体的にこの制度を何とかして欲しい。という思いがあり参加しました。

しかし、話し合いにいき参加すると、全然そんな話はしないという事でしたが、頼まれてもいないのに、手を挙げた手前、取敢えず最後まできちっと参加しようという思いで参加させて頂きました。

今までずっと思っていたのは行政というのは情報を出してくれない、町議さんも、なんか妙に隠し事があるのでないか、そういう思いがありました。

でも、案外ずっと住んでいる割には、いろいろな所で情報を出してくれているらしいのですが、それをキャッチしきれていなかったことに気付きました。

その一つが、こちらの文化会館だとか病院にも置いてあるのだそうですけども、公共情報端末（キヨスク端末）というのが置いてあるのだそうです。

それを見るとインターネットを出来ない者でも、私なんかやっていなくて全然出来ないのですが、町の情報は見れるそうです。そういう事が何と広報紙に出ていたのに全く知らなかったのです。

そういう点で、町民としては、ただ長く住んでいるだけで行政に、一方的に自分の至らないところを棚に上げて、行政に対して批判的な目で見ていたなと反省はありました。

ただ、少し思うのはこういうのがあると分かったのですが、いざある所を見ると文化会館は事務所の前なので、あれが案外図書館側にあったら利用出来るのに。という思いは少しあります。この会議とは少し違いますけども、今そう思っています。



【コーディネーター 東田秀美さん】

それは、具体的に直して行きましょう。次お願いします。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員 須永真樹さん】

この会議に参加してすごく戸惑ったのは、皆さん参加者の方に肩書きがあり、また、年上の方ばかりで、私がこの会議で喋ることなんて無い。とすごく感じていました。

でも、進むにつれてグループワークとかになるとすごく話し易くなったと思いました。

私でもそういうような形で行ってもらえれば、すごく意見とか言い易くて、皆さんちゃんと聞いてくれて、ということはこの会議に参加して思いました。

でも、まだまだずっと不安で、毎回、参加する度に緊張はしているのですけど、私も少し意見を出させて頂けたので、力になれたのかな。と思っております。



【コーディネーター 東田秀美さん】

今回、グループワークという方法論を取らせて頂いたので、声の大きい方だとか、目上の方は目上の方で、たくさんの意見、経験積んでいますのでご意見あるのですが、一人の人の意見を同じ様に扱うということでラベルワークという方法論とグループワークという方法論取らせて頂きました。

今、須永さんが言ったように、一人の意見として、年上の方が言った意見でも長く喋らないで一個ずつ、きちっとラベルでまとめていくという方法を取ったので話し易かったということです。

町長には少し違う質問を、今回、職員の方と町民が全く同じテーブルで話し合うという方法論を取ったのですが、それに対しての不安だとか理事者としてのドキドキ感、そういう方法論を取るということに対しての不安だとかが無かったのか？という事がまず一つ、それから、結果的に約1年半行ないましたが、進むにつれて変化。それは、職員側でもいいですし、町長の中の変化でもかまいません報告を常に受けてどういう変化があったか、戸惑いとか変化の部分をお聞かせください。

【中標津町長 西澤雄一さん】

こういう会議を行うことに対する不安は無かったと思います。

ただ、それぞれ公募で選ばれた方ですから、それぞれ意識は高いと思ったのです。ですから、議論は最初から白熱するだろうと、そして、どちらかと言うと、こういう言い方は失礼かもしれませんが、公募で選ばれた町民の方というのは、普段行政に対する不平とか不満とか、そういう要望は強い方なのだろうと、そういうことで、陳情型あるいは、要望を聞く側というような会議に最初はなるのだろう。という予感はしていました。

職員のほうはどちらかと言うとそれを受けるといふか、そんなことで終止されなければ良いなという。そんな不安は確かにありました。

対等と口では言いながらも、いざテーブルにつくとやはり普段行政に対する、そういうものが出てくるのだろうという不安がありました。

私はずっと会議に出ておりません。出る機会は殆ど無かったのですけども、だから生の皆さんのやり取りというのは分かりませんが、記録とか行なったものは全部文章で私のほうに決裁で来ておりましたので、皆さん方がどういうことを喋られたかということは、一字一句大体目はおしておりましたので、様子は私なりに感じておりました。

日が経つにつれて少しずつ少しずつ、お互いを知って、当初のギスギスした感が薄れて行ったのではないかという。そんな感じを率直に受けました。

それから、行政の方というのは、行政という職場、役場という職場という中でずっと来ていますが、一般の町民の方というのは、やはり豊富な経験とか知識を持った方がおります。そういった点では、そ

ういう方と行政の方と一緒に1年以上も議論することで、行政の職員もまた意識改革がされたのではないかと、率直にそのような気持ちを持っています。

【コーディネーター 東田秀美さん】

実はこのように、町民の方と職員の方が全く同じテーブルで、協働とかパートナーシップのことを考えるのは、道内ではすごく珍しく、殆どの自治体は協働を考える場合には、町民委員だけで考えさせて提言書をまとめるというような感じで、今回が多分初めて、しかもこの大人数で、5人5人位でしたら他にも幾つか事例がありますが、この大人数でしかも町民委員を公募で、しかも職員側の委員も職員公募で選ぶというのは、全く初めての事例なのです。



ですから私自身も、本当はファシリテーターを行ないながらどうなることかと思いながら行っていたというのが正直なところですよ。

だからこそ、普段あまり接しない方だとか、須永さんみたいに若かったり、何を言っているかわからないと言いつつも、結果的に最後はすごく良い意見をどんどん言ってきたり。その育って行く状況と言ったら大変失礼ですが、その変化して行く状況が私側から見てもすごく良く分かる。その場が作られて行く、その状況が素晴らしいと私自身思ったのです。本当に委員一人一人のお力だと私自身思います。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議会長 野毛徳利さん】

今日は打合せゼロで行なっているので、思ったことを思ったように言ったほうが良いと思っています。

私も民間の立場の中で出てきました。言い方は少し悪いのですが、行政の人達というのは、どんな考えで、どんな事を日々しているのだろうと興味がありました。

今回は公募ですから、偉い方は少なく若い方が多かったのですが、そういう人達と議論していますと、始めはやはり我々民間の意見を聞く一方なのです。

実は僕はそうでは無いと、逆に聞くのではなくて、まず、どう思っているんだろう俺も聞きたい。ということで話していくうちに、感じたことは我々と行政の人達の大きな違いは、我々民間ですから商売やっている人間が殆どです。そうすると、企業ですから利潤を追及していく訳です。

ところが行政の人は予算を取ったら、その予算を消化するということで、それが儲けに繋がるか繋がらないかということは、あまり関係のない部分というのはあると思うのです。

それが良いとか悪いとか言うのではなくて、意外と民間から見るとそういうところを、逆に行政は何を考えているのだ。とこういうふう思うところがあると思うのです。

実はよく話し合ってみると、やはりいろいろな事勉強をしています。我々はまちづくりだとか町のために考える時間というのがなかなか取れなく、自分の企業を何とかしなければいけないという時間に使いますが、行政の人達はやはり町ということを考えているのです。

ところが、あんまりそれを言えない立場にあるということで、その辺は少しお互いに官民一体となって受け皿というものをきちっと整理してあげると、非常に良い意見を持っているし、また、若いなりに町民のために一生懸命調べてくれたり、いろいろ動いてくれて、そういう期待感も実はあるのです。

そこのところをやはり共有化して行なっていけば良いように感じました。

【コーディネーター 東田秀美さん】

ありがとうございます。まさに次の質問はそういう内容でした。本当に今回経験してみて、ざっくば

らんに本音の部分で、パートナーシップを進めるために必要なこととは何だと思いますか？

【パートナーシップを進めるまちづくり町民会議委員 田中俊憲さん】

常々思っているのだけど人間の欲望には限りはないのです。だけどもお金のほうには限度があるので。幾らでも使って良い。だから行政として、あれもやれ。これもやれと言われても出来る訳が無いと思う。それは当たり前だと思います。

だけど、それで終わりだと面白くないので、何とかして中標津がこれから良くなっていくためには、若い人、子供たちが良い町だったと言えるような町にしていかなければ、将来は無いと思っています。

【パートナーシップを進めるまちづくり町民会議委員 西村 穰さん】

パートナーシップという言葉から受ける雰囲気とか、協働について何となく分かりますが、今いちはっきりしない。というのがありまして、どういうふうに言うと良いのかと考えてきました。

公共の行政体に昔はやはり力も頭脳も集約して、町を切り開いて行くという部分が相当あったと思うのです。

そのうち民間がすごく力を持ってきて、公共サービスというのは役場だけのものではない、例えば、公共バスなんか民間が行なっている。そういうふうに変ってきて、そのうちにその2つを合わせ持っている団体、企業が行政と一緒にいって第3セクターというのが出来ました。

第1セクターがあって、第2セクターがあって、第3セクターがあって、今度は、住民とか市民と言われる個人個人が、行政にどう参加出来るか。という考え方を作っていくようになると思います。

言葉としては、第4セクターというふうに言っても良いのかなというのがありまして、何となく行政が担うもの第1セクターがあって、第2セクターがあって、第3セクターがあって、第4セクターというものが出来てきたのだなというような感じで捉えると、分かり易いという感じがします。

パートナーシップという言葉の響きは良いのですが、どうも、すっきりしない訳です。

第4セクターという言い方のほうが、僕は良いと考えたりもしています。

この後のやり方もあると思うのですが、行政が今、PR活動していますが、それが今度は、活動支援ですとか育成のほうに移っていくようなことを行政側はしなければならぬと思うのです。

例えば、NPOを支援する。一般的な住民活動を支援する。単に、町内会活動のようにその地域に限定したものを行なうのではなく、行政の政策・施策に対して、団体等は意見の整理をきちっとしてくるというようなことを、今度はしなければいけない。

そういったものに対して支援をしていくと、どこかの町で予算の1%をそういうものに使っていますが、そのような施策を今度、行政は行なっていかなければならないのだらうと思います。

今後はルール化していく必要があるのだらうという感じはしています。

とは言え、パートナーシップは、行政側の目的の一つに財政的な問題があるという言葉がありましたけども、悪く取られるとお金が無いからそういうことをやるのだらうと取られますが、それでは単なる安上がり行政を行うだけの話です。

そうではなく、意見とか意識という、心のこもった住民参加があって、お互い納得し合って、どちらかにでも不満があるとそれは違う形だと思いますが、不満のない形をどう作り上げるか、とことん納得するまで話し合うこと、そういう形をきちっと作って行かないと、どうしても一方通行になってしまって、結果的には訳が分からなくなり消えてしまうことになる。

そういったものを忘れずに、今後展開することが非常に大切なのだらうという気がしまして、ですから言っている側も苦情ですとか要請、陳情だけでは無く、提案力のある団体、個人になって行かなければならない訳でして、社会的な課題を解決するという。その態度というか、そういうものが必要なのだ



ろうと感じており、提案力のある住民、個人を育てて連携が取れる様にするのが、行政の非常に大きな役目であると思っています。

議会との関係もいろいろありまして、議会の話はパートナーシップの委員会の中ではあまり話されておられませんので、恐らく今後問題になると思います。

私も勉強不足ですので、その辺をどうしたら良いのか考えていませんが、きっと、議員の皆様もそういった話し合いに積極的に参加することによって、住民と議会が身近になるでしょうし、行政と住民と議会との関係も非常に盛り上がりながら進むのではないかという感じがしています。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員 千葉幸子さん】

町民として必要なことは、恐らく無関心でない事と諦めないことではないかと思います。

なかなか打っても響かないと私なんか直ぐ諦めてしまいましたが、やはりずっと住もうと思えば諦めないことだと思います。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員 須永真樹さん】

私が思うのは、人間として思想だとか思いやりだったり、それが一番のひきがねになるのではないかと考えています。

それが無いと、このパートナーシップの提言を作って行けないのではないかと感じていました。

【中標津町長 西澤雄一さん】

どうやって行政と町民との信頼関係を作っていくかということが、やはり良い町を創っていくためには一番必要なことだと思います。

そういう信頼関係を構築していくための一つの取り組み方として、今回のパートナーシップでの会議があったと思っています。

多分、これで終わったらこれで終わってしまうので、これをどうやって今度は推進に向けて行くかというのが、次のステップなのです。やはり意識を高めて、これは行政側も町民側も信頼関係を構築していった輪を広げていく。口で言うのは簡単かもしれないけど、輪を広げていくというのが大事なことであって、どうスピーカーになってこれを広げていくか。ということが大事になってくると思っていますが、現実には非常に難しいと一方では思っています。

というのは、私町長に就任して直ぐまちづくり町民会議、住民の懇談会をかなりの数を行いました。合併という問題もあったものですから、かなりの人間が集まったのも事実です。

その他に出前講座も行いました。かなり行いました。それでもトータルしますと、1,000人位の住民との懇談で多分終わったのではないかと考えています。

今、有権者が中標津は1万8千から1万9千人位居ますから、あれだけ頑張っても、10%も対話、会話出来ていません。

ですから住民に理解を求めて懇談をして行政のことを伝えていくということは、非常に難しく困難なことだと思います。

しかし、そう言ってしまうとお終いで、やはり今回の住民会議のメンバーだとか、あるいは今日来た方々が、それぞれの企業に帰ったり団体に帰ったり自分の家庭に帰ったら、スピーカー役といえますか伝道者役をやるのが大事だと思っています。これから進めるために必要なことと言いましたので、多分そういう意識を皆で努力して創



っていこう。ということになると思います。

【コーディネーター 東田秀美さん】

ここからは会場から意見頂きましたものも含めて、皆さんとやり取りしたいと思います。

まさに意見シートの中に今町長が言いました。町政懇談会は参加人数が非常に少ない。具体的に増やす方法は無いでしょうか？という意見が出されています。

【中標津町長 西澤雄一さん】

取り組み方について、方法はたくさんあると思います。

例えば、まちづくり懇談会といったなかなかとつき難いので、何かテーマを設けて、そのテーマに沿って住民が集まって皆で懇談するとか、そのようなことも一つの方法だと思います。

まちづくり全般のこととなりますと広すぎるということもある。だから、何かのテーマを掲げてそれについて皆で懇談をするとか、あるいは設定の期間だとか、それから、場所の問題だとか、うちは出前講座というものがありますので、場合によってはこっちのほうから出て行って懇談をするというものもありますので、そういうのも出来るだけPRをして、積極的に行なっていくやり方。いろいろと方法は改革していけばあると思っています。

【コーディネーター 東田秀美さん】

意見シートで寄せられた意見は順次お答えしていきたいと思いますが、全てお答え出来る訳ではないことだけご了承ください。

一番意見シートの中で特に具体的なところですが、NPOなどの団体の活動状況等を情報として押さえておくことが大事だと思う。

まさにおっしゃるとおりだと思います。

把握するための仕組みづくりなどはどのように考えるか？ということで、今回の提言書の中に具体的な解決策としてこのことも入っています。

来年度以降これについてどういうふう to 実際にするか、出来るかとか、何時から始めるかとか、どういう形でこのシステムを作っていくか。というようなことを、話し合う場を来年度以降設けていきますので、これに関しては細かいことは来年度以降、詳細に話し合っていきたいと考えています。

意見シートで一番多かったのは、この会議を解散した後にどのように発展させていくのか？今後の具体的な取り組み、進め方を教えてほしい。という意見が一番多いのです。町長からお答えして欲しいのですがいかがですか。

【中標津町長 西澤雄一さん】

大変なご努力で、一定の提言書は出来ました。

今度は、この基本的な提言をベースにして、実践に向かっての、例えば仮称ですけども推進していくためのパートナーシップ推進研究会を発足して、具体的な今度は推進のための研究をして行くような方法を考えて行ければと思っています。





来年度の取り組みについては町民会議の中でも、何度か話し合いはされていますが、今、町長からお話しありましたが、仮称ですけども推進研究会という形で位置付け、今回の町民委員卒業生の皆さんと、職員の皆さん、それに部長職や課長職の皆さん、今回の中にも入ってはいますが、具体的な一つ一つの個別の課題をどうしていくかとなると、当然、担当課の皆さんが必要になってきます。

その方たちと一緒に一個一個の具体的な解決策案を、どう進めていったら良いかとか、進められるのかられないのか、というのも含めて話し合ったり、組み立てていったり、逆に、これはまだ予算がついていないから難しい。では難しいけれども難しいなりに何時からどう進めていくのか。というようなことをある程度話し合えるような枠組みを考えています。

それは、役場の中で位置付けられる活動というか事業なのです。

それとは別に、この間私自身が町民会議の皆さんにお声かけさせて頂いたのは、町民会議が終って、さようならで終るのではなく、もう一度全く町民会議と関係なくなった状態で、今回の町民会議に参加した皆さんに、私が勝手に声をかけたら集まって頂けますか？ということをお声かけしました。

推進研究会（仮）で話し合った事に対して、具体的に動かす。ボランティアだけでもそれを行っていく。例えば、野毛会長だったら商工会の中で出来ること。例えば企業の皆さんで出来ること。若しくは福祉の団体で出来ること。といういろいろなセクションに分かれていくと思います。

それを行っていく場、考えていく場、どう行っていくたら具体化出来るか。ということ、考えていく場を、是非、今回の町民会議の終わった後に、発展形という形で行っていく場を、私からお声かけさせて頂いて、その中で発展的にいろいろな形で、動いていくということを行いたいのです。ということ、皆さんにお声かけをして了承されました。

今後、何に対してお声かけ出来るか、どの程度の方が集まるかは、未知数なのですが、これから是非、役場の中にあるパートナーシップ推進研究会（仮）とは別に、町民側で動いていく仕組み、考えていく仕組みを行っていきたくと私自身は思っています。

まさに意見シートに書いていますが、行政への提言として終るのか？というところです。

提言は勿論、提言として行いますが、次のステップを実際具体的に行っていくことです。

それは、行政内部でも町民側でも考えて行きたいと思っております。

後は、情報交換とかよく見るのだけでも、明確な内容が欲しい。と書いてあるのですが、今回は残念ながら先程もお話しましたとおり、パートナーシップに取り組むための取り組みの方法論を考える場でしたので、そこまで明確な内容まで落とし込むことは出来ませんでした。次年度に一つずついろいろな場で見えてくる。というイメージで私自身おります。

それと、対話の経過の分かるような情報共有のあり方はありますか？というご質問を頂いていますが、今回、まさに町民会議の議事録が全て、インターネットをやられていない方は申し訳ないのですが、町のホームページに全て議事録の詳細な内容が公開されています。また、役場の1階の情報コーナーなどにも出ていて、そのような形で対話形式で出来るだけ経過が分かるような公開をするように、今回の町民会議は特に心がけました。

今後も他の場面で、違う部分でもそれが活かされれば良いと思います。

後の意見は、少しパートナーシップとは関係ない部分でしたので、申し訳ないですが、ここでの議論、回答はひかえさせていただきます。

パートナーシップの事について会場の方からご意見とかご質問がありましたら挙手をして頂きたいのですけども。

【会場参加者 パートナースhipで進めるまちづくり町民会議委員 佐藤光弘さん】

この会議に参加した時に、大変な所に出てきたのと、まちづくりの町民会議、そこしか読まずパートナーシップは読まなかったものだから、まちづくりということになれば私も行って意見を言おうと思って行ったら、そこが一番時間がかかったのだけど、パートナーシップのルール作りとなったものだから、そこに到着するまで随分時間がかかったのだけど、何とかこぎつけたという部分あります。

もう一つ、町長の腹は一体どういう腹なのだという事なのですが、共に汗してまちづくりに努力するというのは、皆でまちをつくるのだからもっと町民もお金を出せという。腹があるのか無いのか。ということ町民会議で聞いたら役場の職員の方から、そういう事は絶対やりません。しないはずですよという答えを貰った、それから安心して会議も出たのだけど、年金暮らしだから今以上に、お金を他所に出すことなんか出来ないから、お金をかけないで

行なえる仕事を考えて、行なわないと駄目だと思う。

町長さんどうですかそういう腹はなかったですか？

【中標津町長 西澤雄一さん】

そういう事は、ありません。

【コーディネーター 東田秀美さん】



最後の質問になります。今回、提言書を作りました。大体やり終えました。今度の町民会議の時に反省会をして、3月の末に町長に提言書を提出し、基本的に終るのですが、その提言書を今後、自分自身がどのように活かしていくか。どういうふうに自分自身が取り組んでいくか。それは個人という立場でも、自分が仕事している団体という立場でもかまいません。自分自身がこれからどういうふうにしていくか。というところをお話して頂ければ良いと思います。

今度は逆から須永さんからお願いします。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員 須永真樹さん】

今、パッと聞かれてもどうなっていくのか分かりません。

割と私は参加していたほうだと自分では思っていたので、同じような感じで何かあったら参加しようと思います。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員 千葉幸子さん】

自己紹介の時に申し上げましたように、組織も何もなく単なる一市民なので、ここで急に聞かれても、こういう物をまとめておいて何もやりませんでは無責任なので、最初に参加した時に、具体的に要望のあったものを、まず行政の方に向けて発信してみようと思います。

それで、どうにか具体的に自分も動きなさいとなったら、またそれはその時に考えて自分の希望実現のために向けていけたら良いかなと思います。

【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議委員 西村 穰さん】

ルール作りをしていたということで、土台が出来上がったと思います。

第一段階の、この土台をどう活かしていくかというのが、第二段階であって、最終的にはまちづくり条例というのがありますが、そこまで至るにはもう少し時間がかかるという感じがします。

それぞれフィールドで、町民一人一人が全ての行政の施策に精通しているなんていうことは、あり得ない訳でして、必ずその得意分野、好きな分野、そういった分野での活躍というのを、意見を言ったり

聞いたり、それをどう具体的に展開していくか。というような場を作らなければならない。というのが行政側に課せられた課題という感じがします。

そういう場でいろいろな人がいて、たくさん意見が出るから、良い意見がたくさん出ると思うのです。そうなった時に、行政の職員が考えているよりも、遥か高いレベルの話がたくさん出ると思います。

それを職員側は真摯に受け止めて、行政側の施策の中に盛り込んで展開するということは、とても大切ですから職員側としては、たくさん勉強しなければならないのだろうという感じもします。

情報というのは行政側にどうしても集まるように出来ています。

それをどう知ってもらうかということで、先程、キヨスクの話もありましたが、やはり見られるようになっていくのではなくて、積極的に見てもらう、どうすると見やすくなるか。というのは、常日頃考えて行かなければならないことです。

そういうことに対しての住民の意見。行政側に一つ一つ反映させるという細かな所まで、行かなくてはいけないのだろうと感じています。

それを次に場づくりに持って行って、意見が出なければ、何も言っていないから皆賛成だというようなことでは駄目なのだと思います。

皆心に思っていることはたくさんある訳でして、その心で思っていることを、言葉に出る仕組みづくりを行政側はしなければいけないのだろうと、誰も来ないから文句は無いと言っているようでは駄目なのです。

たくさんの人が来て、たくさんいろいろなことを言ってもらうのが良いと思わないと行政側としては、このパートナーシップは恐らくうまく行かないと思います。

そういった行政が果たして作れるかどうかというのが、きっと行政側に課せられた大きな課題なのだと、言ってしまうと重たいという感じが私はしますが、ですから職員というのは、パートナーシップというのは始めから話しが重たいと思っていましたが、やはり行ってみると重たいという感じがします。

でも、住民の皆さんといろいろな話をしながら、楽しく楽しくまちづくりをして行くというのは、非常に行政マンとしては願ってもない話ですので、そこに生き甲斐を感じるような、職員側がレベルをそこに持っていくということは、しなければいけないですし、辛くなってしまうと、仕事も楽しくないというのは良くないことです。そういったことも一生懸命しなければいけないのだろう。という感じがしております。

【コーディネーター 東田秀美さん】

質問したいのですが、場づくりのイメージ、場というのは例えばNPO活動センターだとかそのようなイメージですか？

【パートナーシップを進めるまちづくり町民会議委員 西村 穰さん】

そうです。今まで話し合った土台があって、それぞれのフィールドで実践をして行くといった時に、フィールドの場所です。例えば、話し合うセンターのような所があって、そこ行くと詳しい情報が知ることが出来たり、どうしても役場の中に来て教えて欲しいというのは、なかなか言い難いことですから、やはり住民の人が集まれるような場所があると、気軽に来て更に深い情報を知ると、それ以上知りたければ更に何か方法を考えると、そういった気軽に立ち寄れる場というのは大切な雰囲気作りとしては大事なのではないか。という感じはします。

【パートナーシップを進めるまちづくり町民会議委員 田中俊憲さん】

私は口だけです。また喋る場所があったら喋ります。

23日釧路湿原自然再生シンポジウムに行って来たのですが、その時、兵庫県の豊岡市の市長が来て講演していました。

コウノトリを再生させた人で、すごいと思ったのだけど、私も昭和45年中標津に来た時には、この

町でイトウが釣れていました。今は殆どいませんが。

イトウというのは、鮭科の魚で、川で卵産むのは良いのだけど、海で餌を食べて子供生んでからも、まだ死なないで海へ行って餌食べて、また帰って来てというのを繰り返す。寿命が長いから１メートル位になる。そういう魚が住めるような環境を、中標津町は是非とも作っていくような形になったら、世間に威張れるのではないか。他の町に威張れるのではないか。そういうまちづくりを目指してもらいたいと町長にお願いします。



【パートナーシップで進めるまちづくり町民会議会長 野毛徳利さん】

個人的な感想ですけども、パートナーシップで進めるまちづくりの最終というか到達地点というのは、ぼんやりですが、行政側の立場の人とよく話し聞いてみて分かったのですが、予算執行するのでも何するのでも平等というものが前提にあるのです。

平等で予算執行するということは、極端に言えば、例えば予算無いから一律に１０％カットという形で、出来るだけそういう形で平等に行なっていく以外にないと思うのです。

ところが、それでは僕は駄目だと思うのです。やはりこれからは私たちにとって、自分たちのまちづくり、それから、中心市街地の活性化いろいろな事考えて、その中で何が必要で、何が優先順位上位なのかをよく皆で話し合っ、それらに民間ベースも参加して行って、そして、これについてはどうしても必要だから、町長さん予算は、こっちの予算を削ってでも、こういうものに予算をつけてください。そして将来の子供のために、これは準備しておかなければならない。ということだとか、そんなことあると思うのです。

ですから、街なかの企業でもやはり努力しない企業は、どうしたって駄目です。でも、努力している企業もあるのです。それをやはり出来れば、助けていけるような予算組みして欲しい。

どこ切っても金太郎飴でなく、やはり多少のメリハリを付けて予算執行をしてもらいたい。という思いもあります。それをやはり我々民間の人間が出て行って、こうだからこうなのだ。ということと一緒に議論して、予算を頂くような、そういう考え方が必要だと僕は思っています。

でも、平等という原則があるからなかなか思っていない出来ないということが、やはりあると思います。

また、ものによっては社会福祉協議会とかそういう所によっては、簡単に予算を削れば良いという問題でもない訳です。いろいろ願いがあると思うのですが、やはり何かを決めて将来のために行っていかなければならないということ、やはりきちっと合意して、だから町長に自信持って、これはカットすると、我慢してくれと、こういうことを行なっていかなければならないと、そう意味での「パートナーシップで進めるまちづくり」ということでなければ、ただ話で終わってしまっ、ただ行って来たよとなってしまうのではないかと、それが私の一番なって欲しくないことです。

これは、今までは畑で言うところの種蒔きからです。この種がどう育つか分からないが、大事に育てて欲しい。

行政は行政で出来ることいっぱいあります。でも、行政として行いづらいこともあるわけです。それは、我々民間が協力し合っ、そして、共にいろいろなことを共有して執行していく、我慢するものは我慢する。

企業で言えば退職金は、その時になって払えるかといえば払えないから、やはり事前に準備していく訳です、１０年かけて１５年かけて少しずつ、そういうことをきちっと、行っていないと今後は行なっていけないのではないかと思います。

【コーディネーター 東田秀美さん】

１年半、皆さんと一緒にやらせて頂いて、参加しているメンバーは少しずつ変わってきました。

先ほど会長も言うておりましたが、やっと種蒔きが終わり、これからどのように育てるか、種を蒔い

ただけでは終わりませんので、次のステップも一緒に行っていきたいと思っています。
よろしくお願いします。
それでは最後に町長から、お願いします。

【中標津町長 西澤雄一さん】

本日はありがとうございました。
私自身も民間出身の町長とはいえながらも、2年半が過ぎ、役場の中にいるわけです。
ややもすると、役場の職員になった気がする時もあり、「私は町民の代表なのだ」と気持ちに修正する時もあります。
やはり、私自身が町民と行政の橋渡しをしなければならない、重要な立場にいるということを、今日つくづく感じさせて頂きました。
貴重な時間を割いて1年半、会議を続けてすばらしい提言をまとめて頂いたのですから、必ず実現に向かって次のステップに進めていきたいと思っています。



初めての取り組みであり、今後、事業を進めるにあたり、これまで以上に大変な難しさがあると思います。失敗もするかもしれません。失敗は次のステップの糧であり、失敗が問題ではなく、失敗から学んで進んでいくことが大事であると思っています。

皆さんといろいろな議論を重ねながら階段を上っていきたいと思っています。

先ほど田中さんから、自然の大切さを伺いましたが、私もそうしています。

日頃から、20世紀に置き忘れたものが二つあると思います。

一つは、自然が相当痛んでいるということです。もう地球が修復出来ないのではないと言われるくらい痛んでいて、その修復のために、木の1本でも2本でも植えていくことが大事だと思っています。美しい自然環境を次世代に残す責任は、私たち大人にあると思います。

もう一つは、人と人が付き合い、かばいあったり、支えあったりする絆が希薄になったと思います。いかに絆を深めて助け合い、支えあう社会、まちになることが大事です。

この二つのことは、行政だけで出来ることではありません。町民の皆さんと一緒にあって、行政も皆さんも同じテーブルについて、どうしたら理想的なまちになるのか、真剣になって議論することが大事で、そのために、パートナーシップで進めるまちづくり町民会議はとても重要な会議だったと思っています。

これからも、町民、行政、団体、企業が力を合わせてまちづくりに努力していきたいと思っていますので、私からのお願いを申し上げましてお礼といたします。

本日はどうもありがとうございました。

【司 会】

コーディネーターの東田さん、パネラーの皆さま、ありがとうございました。

以上をもちまして、パートナーシップなかしべつフォーラムを終了させていただきます。
皆様におかれましては、長時間にわたり熱心にご参会いただきありがとうございました。
お帰りの際には、足元に十分お気をつけてお帰りくださいませ。
本日はありがとうございました。

